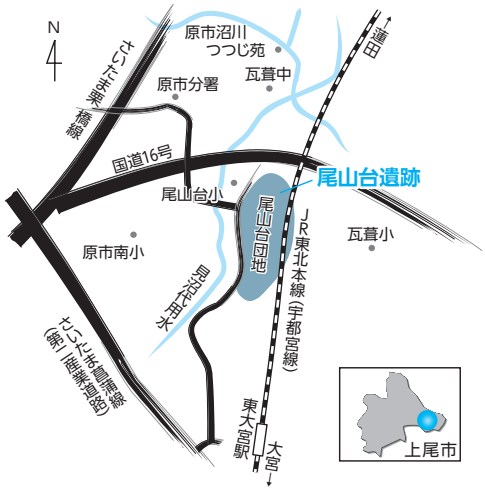
上尾歴史散歩 280

遺跡が語る上尾の歴史

今も昔も住宅地
～尾山台遺跡（瓦葺）～

写真１　発掘された尾山台遺跡（昭和40年）



ＪＲ東北本線東大宮駅から北に1.3キロメートルほど行くと、瓦葺の尾山台団地（ＵＲ都市機構）が見えてくる。現在、約１７００戸があるこの地には、かつて古墳時代の始め頃にも多くの人々が暮らしていた。尾山台遺跡である。

昭和40年の秋、尾山台団地の建設に伴い発掘調査が行われた。調査の結果、弥生時代末期から古墳時代初頭（約１８００～１７００年前）にかけての住居跡が約60軒見つかり、大規模な集落跡であることが分かった（**写真１**）。当時、一つの遺跡から住居跡が60軒以上まとまって見つかったのは、全国初の発見であった。また縄文時代や奈良・平安時代の住居跡や遺物も、数は少ないが見つかっている。

住居の一辺の長さは、おおよそ３～７メートルで、一般的な大きさである。柱穴（柱を立てる穴）が４カ所ほど設けられ、その内側に炉跡が見つかることが多い。かまどができる前の時代であり、土器は炉で煮炊きの時に使用する、台付甕形土器の出土が目立つ（**写真２**）。収穫した食料などを保存した貯蔵穴がある住居跡も見つかっている。住居は、造られた場所や向き、見つかった土器の年代などにより、いくつかのグループに分けられ、数世代にわたってこの地が利用されたことが分かる。

見つかった住居のうち約20軒からは、炭化した木材が折り重なった状態で確認されている。これは、火災によって住居が燃えた跡だと考えられ、遺跡の南部に多く見つかった。火災の原因は定かではないが、同時期の住居であることが推定され、なんらかの理由で大火災が起こり、一挙に燃えてしまったと考えられている。

現在、尾山台団地の中ほどにある公園の一角に、尾山台遺跡から見つかった住居の大きさと、柱穴を表現した空間がある（**写真３**）。本物の住居跡はなくなったが、この公園や団地の壁画に、当時の姿の一部が残されている。尾山台の人々の繁栄は、現代の団地に引き継がれた。今も昔もこの土地には、集落をつくって人々が暮らしている。

（上尾市生涯学習課）

写真２　台付甕形土器

写真３　尾山台団地のモニュメント

コラム column
学史に残る初めてづくしの発掘調査

尾山台遺跡の発掘調査は、新しい時代の発掘調査の先駆けとなった。

まず表土層の掘削に大型重機を使用したことは、全国初であり大きな衝撃を与えた。表土層が厚く、調査面積が２万平方メートルという当時ではあまり例を見ない広さであったため、能率を高める必要に迫られ導入した。遺跡・遺構の破壊につながるとして批判もあったが、現在では一般的な調査方法になっている。ヘリコプターによる遺跡の空中写真撮影も、埼玉県内では初めての試みだった。

当時では県内有数の大規模な発掘調査であった。そのため、調査主体となった埼玉考古学会を中心に、県や市の教育委員会をはじめ県内の研究者、首都圏の大学生の他、近隣の上尾市内の高校生や婦人会など多くの人たちが調査に参加・協力した。

尾山台遺跡は、古代の人々の暮らしを今に伝える貴重な遺跡であるとともに、考古学の発掘調査の手法を新たに開拓した重要な遺跡として、学史にその名前を残している。

発掘調査風景。広大な調査面積であることが分かる